

<教会学校のお話より>

## 夢見る人のように

「また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、  
あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」  
(マルコによる福音書 4章8節)

今から50年ほど前、青森のリンゴ農家に婿入りし後継ぎとなった木村アキノリさん。年に何度も使う農薬のため若い妻が病気になってしまいました。「これからは農薬を使わないリンゴをつくろう」と決心。しかし、リンゴの無農薬栽培は無理と言われていた時代。ワサビを虫よけに置くなど工夫しますが、害虫は増え、リンゴも病気で弱ってしまう。

10年続けたが効果がでない。家は借金まみれ。気弱になったアキノリさんは夜、ロープを手に岩木山に上りました。ある木の枝に紐をかけ、こと終わろうとした矢先、ブツンと紐が切れそのまま地面に叩きつけられる。「ああ、俺はなんてダメなんだ」。絶望して見上げると、それはくるみの木、枝にはたくさんの実をつけていました。こんな山中で誰も手入れをしていないのに、なぜこんな豊かな実りが…?

そのとき、あたり一面に漂うよい香りに気づいた。「土の香りだ」。思わず、手元の土を握り口にほおぼる。「いい味だ…」。

「そうか、良い実をつける良い木を育てるには、自然がつくる良い土が必要だったんだ」。走って山を降り、すべてをやり直した。山から土をもらい畑にまいた。大豆を根元に蒔くと山鳩がやってきた。雑草は伸び放題。まるでジャングル。害虫もくるが、それを食べる無数の虫や鳥もいる。自然の循環が始まった。10年の月日。やがて実った小さなリンゴ。掴んで頬張った。

「これだ!」。奇跡の無農薬リンゴが誕生した瞬間でした。

人間があれこれ手を加えたのではない、自然のままのよい土こそがよい根っこを育て、よい木を育てる。子どもたちの成長も同じかもしれない。大人があれこれ手出ししたい気持ちはわかる。しかし、むしろぐっところえてみることも大事。自然のままの「良い土」をどこまで残せるか。

落ち着いた環境の中で、あふれる自然とたわむれ、人間が心と心を触れ合わず。そんな日々の営みを続けることこそが実は今、子どもにとって最も貴重な「良い土」なのかもしれない。

(つくし保育園園長 つだかずお)

<だいが教会より>

毎週日曜日、卒園生、在園生も集い、子どもの教会(教会学校)をしています。どなたでも参加できます。ご家族と、友だちと、いつでもどうぞご参加ください。詳細は気軽にお尋ねください。

日曜日午前9:30頃 合同礼拝10:30~

(予告)今年のイースター礼拝は4月1日(日)午前10:30に行います。  
楽しい遊びも計画中。今よりご予約ください。